

学生が見る「地域の優良企業」 ～株式会社シーズプレイス～

多摩大学 経営情報学部
小野汰一（3年）・丸山将平（2年）

生活者の支援で地域を元気に

2016年9月6日に法人として設立された株式会社シーズプレイスは、多様なニーズをもった人たち、そして未来を担う子どもたちが、「幸せに育ち・働く」ことができる場をステークホルダーと共にデザインし、個の幸せと地域経済の活性化、持続可能な社会の実現につなげることをミッションとして2017年2月にコワーキングスペース Cs TACHIKAWA や企業主導型保育所である「みらいのたね保育園」を事業としてスタートさせた。

そこから、幅広く事業を展開し、現在は創業支援、子育て支援、地域活性化、男女共同参画の4つを柱に、暮らす地域に新しい価値を生み出すソーシャルイノベーションカンパニーとして立川市を拠点に活躍している。



株式会社シーズプレイスの森林育代社長

多摩地域には、ベッドタウンならではの社会的課題があり、その社会的課題を生活者の視点で当事者意識を持ち地域から解決して多摩地域を元気にしようとしている。

会社の設立

株式会社シーズプレイスの設立の背景には、森林社長が過去に感じた経験が大きく影響している。森林社長は、20代まではプロミュージシャンとしてバンド活動をしていたが30歳になったのをきっかけに、音楽は趣味として割り切り、英会話スクールに就職をした。

しかし、英会話スクールでは、九割九分女性ばかりの会社だったのにもかかわらず、育休を取得した人はほとんどいなかった。なおかつ、英会話スクールは日曜・祝日も営業をしているが、保育園は営業をしていないため、預け先がなかった。

森林社長は、働きながら子育てもできる会社にしていきたかったが、全く通じなかった。「子供がいるだけで日曜日に働かなくていいのか」と言われたり、預け先から子供が熱を出しましたと会社に連絡が来ると「えー！」という雰囲気になったり、全く理解してもらうことが

できず、続けることが難しく2か月で退職してしまった。同性でもその人の苦しみをわからず差別するのに、さらに自分とは違う人だと理解ができず、攻撃すらすることがある。



シーズプレイスが運営する「くにたち男女平等参画ステーションパラソル」の木山直子ステーション長は、同社入社前に渋谷男女平等・ダイバーシティセンター〈アイリス〉に勤めており、2015年の渋谷区が発行したパートナーシップ証明書に関わっていた。

当時、同性間のパートナーシップ証明書ができることは多様性を受け入れる画期的なことであると、大きなニュースになっていた一方、現場では想像を絶するようなクレームと罵声の嵐だった。今まで、木山ステーション長の周りには同性愛などに比較的に理解のある人ばかりだったので、実感が無かったが、世の中はこんなにも差別をする人が多いことを思い知ったと言う。

森林社長が体験したことも、このような社会にある無意識の差別や偏見によるものだといえる。だからこそ、女性はフルタイムで働こうとすると家事育児の体の負担が大きく、働くことをセーブしてしまう。また、家事も育児も楽しみたいし両方やりたい人もいれば、仕事をやりたい人もいる。色々なニーズがあることが分かり、この世の中を変えるために森林社長は「行動しよう」と決意した。

まずは、子供の通っていた保育園の父母会長をしたり、小中高校のPTAをやったり、子供たちの身の回りを変えていくところから行動を起こした。すると、地域自体の課題も見えてきて、さらに子供たちも私も住みやすい世界にしようと思い、市民委員に応募する。市民活動を通じて市政に参加し少しでも市民からの意見が役立てて貰えるように取り組んでいたが、結局、市役所がまちづくりを行い、それに対して意見を出す市民という構図から抜けられないと

いうことに気がついた。そこで、市と対等な関係を得る為に NPO 法人を設立して、事業者として地域課題の解決に取り組むことにした。

NPO から株式会社へ

ただし、NPO はどうしても思いが先行してしまい、そこで収益を上げようという感覚がなく、理事や会員の合意形成を重視するので意思決定に物凄く時間がかかる。そこで森林社長は、より色々なことにチャレンジをしてたくさんのステークホルダーと仕事をすることができるとい理由から株式会社を設立した。

ところが、ここでも世の中の偏見にぶつかる。「ママさんの会社ね」と言われることがあり悔しかった。「男性社長」とは言われないが「女性社長」とは言われる。その「少数派だから」という考え方を何とかしたいと森林社長は語った。ベンチャー、しかも女性だからこそ、どこの馬の骨かと言われないため、まず、経営基盤を安定させるため資金調達を行った。

多摩信用金庫やクラウドファンディング、ビジネスプランコンテストの賞金、事業推進のために国や市から資金を調達した。また、多摩ブルー・グリーン賞を受賞によって、自治体や様々な経済団体・支援団体の「お墨付き」をもらい、沢山の人が知ってもらえたといえる。

「ママさんの会社」と言われたくないからこそ、様々な地域の商工会議所やロータリークラブという男性ばかりのところに入って行って1人の社長として見てもらえるような活動をしているということだった。

関係資産

森林社長は仕事の中で「関係資産」を大切にしているという。

「お金の資産を増やすことはもちろん大事で、それがなければ会社はやっていけない。だけど、人との繋がりという関係資産を増やすことが、会社や自分自身の人生で大切だった。

ワンマン社長のようにその人に力があればまた違うと思うが、私の場合は色々な人の話を聞き、他者の意見を大切にしている。そこから人が人を呼んでくれることで新たな関係資産が生まれる。それが新たな事業に繋がり自分自身の活力にもなる。」

実際に森林社長は関係資産であふれている。先に書いたパラソルという施設も木山ステーション長との関係資産によって生み出されたものである。森林社長が NPO 法人の設立パーティーを開いた際に、当時アイリスに勤めていた木山ステーション長が参加したことがきっかけとなっているという。また、シーズプレイスが運営している「みらいのたね保育園」の園長も、なんと以前の職場の上司だという。私たちが少ない時間のインタビューのなかで多くの関係資産にお会いすることができた。

また、NPO 時代と今とでは関係資産に違いがあるという。

「NPO 時代の関係資産は、本職ではない部分の想いでつながっている関係資産であった。自分たちの考え、価値観に近い同じ思想を持った人たちで協力して事業を行っていく。そのため、どうしてもホームな感覚になってしまい、アウェイの考えができにくくなってしまふ。

そして、関係資産も内なものが多くなってしまい、外との関係資産がなかなか築きにくい。その点、株式会社になった今は、外との関係資産が広がった。企業の男性の方との繋がりは今まであまりなかったが、今は事業を行う上でそのような人たちとのかわりが増えてきている。

以前より、より広い視点で物事を見ることができるようになった。ただ、株式会社だけをやっていたら NPO の時に培った感覚や視点は無いし、関係資産も増やすことができなかつた。両方のメリットがわかることが私の強みかな。」

ママにも支援を

シーズプレイスは、ママインターンという企画を行っている。インターンとは、大学生が就職活動を行う際に様々な企業に職場体験ができるものであるが、それを主婦版にしたものがママインターンである。主婦の方の再就職活動の支援事業でとても反響があり、それがきっかけで今は人材紹介サービスをスタートさせている。

「今のママの再就職は、前にいた職場に戻るか、求人を見て応募してすぐに働き始めるという非常に急いだものになる。それでは本当にその職場が自分に合っているかわからないし、長期のブランクを抱えた状態で急に働くのも難しい。

インターンという形を通して、本当に自分に合った職場かどうかを見極めてもらう。ママのためでもあるし、その会社のためでもある。頑張るのはママ本人だが、こちらからキッカケを与えることはできる。このような伴奏型の支援を行っている。仕事をライスワークと考えればそこまで、何を実現させて自分の能力をどう成長させるのかという観点で仕事をすればその先も広がる。」

また、何かしたいけど何をしたらいいのかわからないという人も多く、相談窓口もやっている。そこでは、相談者のぶれない軸を見つけ出すことを大切にしているという。ぼんやりと考えていることをしっかりと書き出させ、それらが交差する場所を見つけ出す。それがその人のぶれない軸であり、その軸を中心に就業を考えている。

潜在的にあるその人の譲れない部分を自分自身で発見させることが新たな道しるべとなるのである。例えば起業をしようと考えていた人にも、相談の中で実はそれは起業しなくてもできるものであったり、逆に起業したほうがいいものであったりということがある。森林社長によって新たなステージへ導かれた人は数知れない。

シーズプレイスの今後の目標は、地域の方がより良い生活ができるよう、多摩地域を活性化させていって、多摩地域をよりかっこよくすることだそうだ。そうなる未来はすぐそこに迫っている。



取材の感想

今回インタビューさせていただいた中で、森林社長の行動力とその情熱にとっても感銘を受けました。支援を必要としている人に、適切な支援を届ける。自身が体験した不条理を、自分で変えて他の人も救い出す。そのためにはあらゆる角度からサポートを試みる行動力は何にも代えられません。また、これで満足せず更に多くの事業を行い、より良い地域の実現に向ける情熱は、他の誰にも超えられないものを感じました。（小野）

今回のインタビューから森林社長の「世の中を変えたい」という想いが強く印象に残っている。社会の無意識の差別や偏見、女性に偏りがちな家事育児、女性の再就職など実際に経験したこと原動力となり、社会課題の解決への取り組みに繋がっている。森林社長が多摩地域から社会課題の解決に取り組み、世の中を変えていこうという熱い想いに胸を打たれました。（丸山）

以上